韻相通の故に、にぎたづともいひ、みぎたづとも云とえらばれたり、みとにとは、殊にかよはしていはるゝ字と聞えたりいはゆるなみはやのくにを、なにはとはいふ、にをゝみをといへり、蛯をみなと云がごとし、それにとりて、この集に、にぎたづのことばをよめる歌に、第一卷には、熟田津爾、船乘世武登、月待者とかけり、熟田津これをにぎたづと云事、日本紀にみえたり、又或は和多豆ともかき、或は柔田津ともかけるは、皆にぎたづと和すべきことはりなれば、いまの點には、みなにぎたづと和する也、

〔萬葉集三雜歌〕山部宿禰赤人至伊豫温泉作歌一首幷短歌○中略

反歌

百式紀乃大宮人之、飽田津爾、船乘將爲年之不知久、

〔松葉名所和歌集十一阿〕飽田津　伊豫仙覺抄見タリニ

〔萬葉集略解三上〕飽は饒の誤なるべし、にぎたづは伊與也、既にも出、久老云、或人其地のさまよく考れるに聞しは、饒田津といふ地も飽田津といふ地も、今猶有とぞ、猶考べし、

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕悲別歌

柔田津爾、船乘將爲跡、聞之苗、如何毛君之、所見不來將有、

〔豫章記〕三島大明神御天下以前、和氣郡沖島下給、故母居島號ス、爰三子產給、御子船海上放、此島住給フ、○中略御三王子御舟、當國○伊豫和氣郡三津浦著給フ、卽國主奉崇、小千御子稱ス、此時事ヲ以萬葉集歌有、云、堀江漕、棚無小船、コギカヘリ、思フ人ヲヤ、戀渡ルラント讀メリ、古文ナドニ難波堀江ト云ヘリ、不知人故也、是ハ和分ノ堀江ナルベシ、

〔豫陽俚諺抄和氣郡〕三津　是は伊與王子第三ノ御子ノ御船著シ所故、三津ト號ス、

〔南海治亂記五〕細川晴元討豫州記